

天井にドア

袋開けたスナック 昨日の夕飯の残り
読みかけでもう読んでないマンガ なぜか聖書
使い方のわからないヘッドホン 汚れたマーガリン
ずっと昔旅行で買ったオカリナ
すべてが色あせてゆく 何もできずに年月ばかり過ぎて
夢はみんなただの夢になるんだって心の中つぶやいて
何か楽しい仕事をしたかったんだ
疲れてベッドに倒れこんだ

真夜中の高い高い天井に ドアがあるんだ

ぽつり白い光を届けてくれる ドアが開いているんだ

そしてそのドアは遠すぎて 絶対に届かないんだ

いつも闇の中見つけて 涙が出る程 見つめてしまうんだ

もう何を言ったってどうせろくでもない
ただのツイートまたはつぶやきでしかない
この思いをわかってくれる人なんてどこにもいない
小さい頃から夢があって でも夢があっただけで何もしなくて
ノーベル賞とれるかもなんて 天才になったつもりでいて
きっと何もかも夢で 終わるんだろうとかまだ若いのに言って
無駄に冷めた飯をかんでいる

何か楽しい仕事をしたかったんだ
それが何かわからないまま

昼が終わったらすぐ夜が待ちかまえていて
太陽を引きずり落とす
大切な毎日がどんどんチープになってゆく
まくらの近くに置いてある このマンガどこまで読んだんだろう？
主人公の強さが悲しくて途中でやめたんだろう
なぜ聖書なんか買ったんだろう？
生きるのがちょっとイヤになるだけだろう

ほこりをかぶったヘッドホン 汚い飯
オレンジ色だったオカリナ
いつの間にか年をとって
現実の見えない空想気味の老人になるのならば
このまま目が覚めなければいいのに
ガラクタとわけのわからない夢を抱えて眠る

悪い方ばかりに思考が行くんだ

そんな時はせめて上を向いて寝るんだ

真夜中の高い高い天井に開いた ドアを見つめるんだ

絶対に届かないのに 光がこぼれてくるんだ

涙がこぼれてくるんだ そこから見ていてくれるんだ

どんな闇の中にも そのドアは照らしてくれるんだ

宇宙の天井から

1円

あなたは世界にとって たった1円の価値かもしれない

でも忘れないで

1円足りなかったら 物は買えないんだ

春だけどまだ雨風が冷たい日

あの人は 熱いコーヒーが飲みたかったんだ

自販機があんまり無い田舎 コートを押さえてコンビニへ入った

熱いコーヒーは 100円だった

でもあなたを失ったあの人は

99円しか持っていなくて

熱いコーヒーが飲みたかったのに

ただ 熱いコーヒーが飲みたかったのに

あなたは世界にとって たった1円の価値かもしれない

でもその1円があるから 大切なあの人は何かを買えるんだ

あなたがいなかったなら あの人は何も買えない

いつも1円足りない

あなたはいつか自分を たった1円の価値と思うだろう

世界に必要無いと思うだろう

でも大切なあの人のために あなたは1円の価値だろうか？

熱いコーヒーが買えないという それだけの価値だろうか？

明日に困ったら思い出して

死ぬのは勇気じゃない

動画再生

審査員が手をあげる

「はい 彼女の来世はアマガエル」

皆 そうだそうだと 口をそろえて言う

バッグの中にひそかに入れたキャンディーマイブーム

見えてるよ それ

見られてるよ

完全にギルティーです

アナタを観察・動画にとってる組織がある

それは「神様」とも「運命」とも言う

運命の審査員たちの前で アナタは何をパフォーマンスするのか

眠い審査員たちは 見過ごしちゃくれない 全部つつ抜けです

人を助けるのか 心から助けるのか

助けていい人に見られたいだけなのか

車椅子を押すアナタは ゆっくりと新しいスロープを下る

透明な新緑が光る 影のカーテンごしに話しかける

アナタの表情がほころぶ 初めて年老いた彼が

笑ってくれたから

一部の審査員は眠くなってきたので ちょっと昼休み

他の審査員が一瞬止めた動画に目を光らせる

動画再生

アナタはこの瞬間何をしていたのか？何を思ったのか？

運命の審査員たちがアラ探ししてる ずっと見てる

地球上のどこへ逃げても ずっと動画はとられている

あの高校生の動画再生 はいギルティーです

審査員たちの天のyoutubeにUPします

あの調子にのってるイケメンの 動画再生

今帰ってきて虫をつぶしただろう ちゃんと見られてます

審査員たちがアラ探ししてる

この瞬間も

車椅子の方向を変えるアナタの心はその淡い髪のように

色はついていないようだ もっと違う角度から動画とれ

運命の審査員たちが飽きるまで　どうかアナタはピュアでいて
何をどんな瞬間にしたか　胸をはって言えるよう
繰り返し話しかけるアナタの胸がひびいて彼の口がわずかに開く
影のカーテンが心のように揺れる
どれだけアラ探しされたって　5月の散歩道のように透明でいて
運命があきらめるまで　動画は続く

復習

君の事を 昔の歌歌いながら考えてたら
歯ブラシにハンドソープ盛って 歯をみがいてしまったぜ
大変だ
これだねきっと
これしかないね
復習だね
復習ということで

君が仕事に行ってる間に私
ああなんか動物の絵を描いていたんだ
別に意味も無くわけもわからない衝動で
途中から君に似せようとしたらどんどんかけはなれてった
なんだかヤバい感じの生物ができた
ついでに君の顔もとなりに描いてみた
まったく似てない事には自慢可能だ

そして復習
私のまくらのとなり 君のまくらの下に
このヤバい動物と
君のつもりで描いた顔のようなもの
そのやぶりたてのメモ帳を こっそり入れとくよ
今夜はいい夢見てなって

あのね
ちょっとその君の夢の中 いつも君のとなりに
私がいたらいいなって思うのは確かで そうなんだけど
君の車に頭をぶつけて 車にキレてる程度の
アホな事しかやってなさそう
でもね ちょっと見たいよ

手をつなげば その夢見れる？

ああ私が何の夢見たって君が主人公なのは確かだ
ただ君の夢ではどうなんだろう
君が主人公の夢を33回か34回見たんだ

でも君の目からしたらどうなんだろう
救いようの無いバカに映ってたらなんかイヤだぜ
私はどんな存在なんだろう

君の事を考えるのはもうやめですよ自分の事を考えなさい
現実世界を見なさいもうやめだって思うんだけど脳がもう
こわれてるからやっぱり君の事を考えていて買い物で田んぼにハマったり
私 こわれてます

君はまだ帰って来てもないのに
さっきの復習しか頭に無いよ
無駄にドキドキするよ 待ちきれないよ かなり無駄だけど
部屋の中をさまよったりするよ
いい夢見てね っていうか見たいよ
まくらの下の復習は君にどんな夢を見せてくれるだろう？
むしろ私が見たいよ

はっきり言っちゃえば夢の中でもいっしょがいいし
これから見る夢もいっしょにしてみたい
でも私はまずその君の夢の中で
ボケ担当に違いないんだ
そしてその夢がどんな景色でも 私は泣くと思うんだ・・・

水の中に落ちてゆくよ
泡を吐きながら
それを見てわたしは泣くよ
昨日の事みたいだ

水はいつも暗くてきれいだよ
光をまといながら
それを見てわたしは怖くなるよ
友と青いはずの海

君の分だけ強く生きたいって叫んでみたって
それはとってつけた言い訳
赤い花を抱え
サンダルの砂を海の水で払おうとして
引く水に何もかも持っていかれそうに感じたっけ

ねえ
いつも笑いながら君を見て泣いてるのは
わたしだけかなあって思うんだ
君の笑顔のとなりで泣いてるのは わたしだけかなあって思うんだ

ずっとはいつか終わってしまうから
わたしはずっとって約束するんだ

窓から見える海が好きだった
夏はよくそこで君と花火やってた
君の花火はいつも赤かった
今は海なんか海なんか コンクリートでかためてしまえって思う
また 夢を見たんだ

おまえさん

恋に風呂場が沈む
もうまともな仕事なんてごめんだ
誰にも会わない自給自足がいいな
故郷に置いてきた約束
彼女は当然止めた 震える手で
「わたしは今のあなたがいいの
指輪は返さないから
もし間違えたならいつでも戻っておいで」

週休7日の仕事が無くなって思った
仕事や1万円という紙切れに
自分がつぶされていく気がして
飛行機も仕事も地下街も無い場所で
気がすむまで昼寝したい
君の心が今ボードならハゲ

僕は今 とある国の羊飼い
久しぶりに
何マイルもはなれた工場のオッサンと会った
「おまえさん その羊の毛を分けてくれないか」
僕は首をまた横に振った
「せめてさわるだけでもいいから」
長方形が云々で弾けちまいそう
ただ仕事がしたくなくて
彼女以外 誰にも会いたくなくて
自給自足を選んで
畑を耕してから山羊のミルク飲んで
「満足」ってどういう意味か
辞書で調べようとして
引き出しを開けたら
軍手してるからつけてない 満たされない指輪一つ

飯まだかよヘタウマデンジャラス
またオッサンがこりずにやって来た
「その羊の毛はとてもいい

おまえさん 俺と新しい事業でも起こさないか？
また さわらせてくれ」
オッサンは羊の毛をいつもの呪文のようにさわった
そして突然
その毛を刈り始めた
止める間も無く

「おまえさん 誰にも会わない自給自足が
そんなに楽しいのかい？
俺なら 自己満足さえ出来ねえな」
呪いの引っぱりダコ 地に落ちる
「もし仕事がこの世に無かったら
自分が誰の役にも立てなかったら
俺は生きてられねえけども おまえさんもそうだろう？」

おまえさんの羊の毛は とても質がいい。
いい糸を作らせてもらうぜ。
ありがとよ。

破壊的セクシー台風
震える手で彼女にエアメールを書いた
「あの指輪はまだ大事にとってあるよ」って

君の声が聴きたいって。

「正しい大人」

「ねえ 学校の授業で オレ 習ったんだけど」
「…まず そのオレって言葉づかいをやめなさい」

「なぜ？」

「下品だから。ママ 恥ずかしいわ」

「なぜ『オレ』が下品なの？」

「…」

「じゃあボク 学校の授業で 習ったんだけど」

「なあに？」

「そうやって 棚の一番後ろから 新しい牛乳を取るのはいけない事らしいよ

古い牛乳がたくさん捨てられているんだって」

「あんた 古い牛乳が飲みたいの？」

お腹こわしても ママ知らないよ」

「ママはボクが大事なんだね

日本はどうでもいいんだ？」

「…」

教科書なんか置いといて

正しさの話をしよう

親が言う事はすべて正しいの？

先生が言う事はすべて正しいの？

親の言う事と先生の言う事 違ったらどっちが正しいの？

考えよう

絶対なんて無い そんなもの何も無い

まだボクには

時間がきつといっぱいあるんだから

誰が言ってる何がなぜ正しいのか？

逃げずに考えて ちゃんと考えて

現実を嘘を受け入れてかんで飲みこんで

それはボクが 「正しい大人」になるっていう事だと思うから

正しさなんて無い 心の中にしか無い

ああでもこうでも考え続ける

「正しい大人」がいるだけ

心の中に明かりを持っている人だ

スーパーモデル

この安いTシャツいいでしょう？
600円って不思議でしょう？
どこの国の人を作るんでしょう？
そんな風にしか思わないでしょう？
いつか旅行に行ったとき
バスの男が降りてくるでしょう
うつろな目の彼女らはなぜでしょう
そのバスはどこへ行くんでしょう？
彼女らはどこへ行くんでしょう？
タバコの男が答えるには
服を作りに行くんでしょう
きっと僕らの服を作るんでしょう

バスの奥の奥 涙目の少女は
誰にもきこえない声で 歌を歌うんだ
たぶん僕にしか きこえなかった

日本に帰ってきたでしょう
でもあのバスを覚えているでしょう？
スーパーモデルの広告見上げる
ティーン二人の熱い目
流行は変わっていくのに
いつも弱肉強食 そうでしょう？
このキツイ匂い大丈夫でしょう？
上司が言うから大丈夫でしょう

わたしだっていい服を着て れんがの街を歩きたいよ
春風といっしょにティータイム
どれだけいくら働いても貧しいや
こぼれ落ちてゆきそうだ今夜は
あるようで無いようなわたしはどこか

変な匂いがするから
あんまり着なかったこのTシャツ
あのポンコツバスの誰かが作ったんでしょう

青い液体とガスの中で
バスにつめこまれたままで
ここはいつの時代でしょう
平成って何だろう

何も知らず 知らされず ただ安いから買って…

600円のうち何円
あの子は手に入れたでしょう？
目をそむけていてはダメでしょう
でもうちだってお金無いでしょう？
長く大切に服を着ましょう
いつか僕らの身になるでしょう
良くも 悪くも そうでしょう？
あなたには心があるでしょう？

動画再生

<http://p.booklog.jp/book/113942>

著者：雨野 小夜美

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tinycolor/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/113942>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト